

学会主催の思い出

第29回 会長 麻 田 栄

第29回日本胸部外科学会総会は、去る9月30日、10月1日、10月2日の3日間に亘って、神戸文化ホールで開催された。昨今やっとあと始末が終ったばかりで、まだ思い出を書くという感慨ではないが、色々と苦心したことや、私が受けた2・3の印象を綴ってみたい。

学会は1年に1回、学問を志す者が集って最新の研究を発表する機会である。会員が忌憚のない意見を交換し、お互いに納得し、何か有益な知識を得るのでなければ意味がないと思う。「学会は討論の場である」というのが、私の年来の主張であり、この考え方を基本にして、今回の学術集会を企画した。

幸い会場に使用した神戸文化ホールが二つの立派なメインホールを具えているので、これを利用すべく、シンポジウムを多くし、これに十分な時間を当て、今日の胸部外科のトピックを網羅すべく志した。本学会は、食道、肺、心臓の三つの柱が鼎立して成り立っていることはご存じの通りであるが、例年の申込演題数の比率及び私が心臓を専攻していることに免じて頂き、シンポジウムは心臓4（兩大血管右室起始症の診断と治療、連合弁膜症、とくに重症例の手術適応と成績、A-C bypassの経験と工夫—公募、三尖弁疾患に対する手術—シネシンポ）、肺、縦隔3（進行肺癌に対する手術の限界と合併療法、肺外科と心肺機能—公募、胸腺外科の問題点）、食道2（食道手術後の合併症とその対策—公募、食道再建術—シネシンポ）とさせて頂いた。特別講演には、歴代の会長が世界一流の外国学者を呼んでおられる慣習と、将来性のある若い学者が望ましいとの考えから、Toronto大学のTrusler教授（Mustard教授の後継者）と、Harvard大学のBuckley教授（Austen主任教授の片腕）を招聘し、Trusler教授には「大血管転位症の外科」、Buckley教授には「Intraaortic Balloon Pumping, IABP」についての講演をお願いし、さらにこのお二人にはシンポジウムDORV及びA-C bypassの討論にも参加して頂き、有益な発言を頂戴することができた。

以上のごときメインイベントが花々しく行われた結果として、一般演題のための時間がかなり制限をうけることになった。そこで、思い切って一般演題のテーマを限定し、心臓では22、肺・縦隔では6、食道では4の、いわゆる「歓迎テーマ」を設定した。会員諸君は、これを諒とされ、私の提案に同意して下さり、同じテーマに関連した演題が集まったのは、非常にうれしかった。心臓関係の会員の関心がとくに集中した三つのテーマ「心筋保護」、「LOS」及び「心臓手術後の呼吸管理」は、ラウンドテーブルディスカッションに変更した。展示という発表方法はどうも私の好みに合わないで、取り上げなかった。また従来夜間に行われたセミナーや研究会も、会員諸君の折角の交歓の機会をさまたげてはいけないと思い、一切開かなかった。一般演題1題毎に演説時間を7分、討論を5分とかなりゆったりと取ったこともあって、5つの会場を使用し、学会の終了時刻を6時30分まで延長するという強行軍を行ったにも拘わらず、3日間の会期中に、一般演題は337題しか消化することができず、応募された458題のうち27%を削除せざるをえない破目に陥ったことは、洵に残念であり、且つ申訳ないことであった。一般演題の採否は、抄録中に書かれた施設名を一切抹殺し、全く内容のみについてプログラム委員会で判定して頂き、最終決定は会長の責任で下したが、不平や文句が一つも出なかったのは、さすが本学会だけあると感心した。

なお、会長講演は、「心臓手術の反省と工夫」と題し、この20年の間に私自身が体験した2200例の心臓手術例について、失敗をフランクに反省し、私なりに考え、且つ工夫している点を述べさせて頂いた。

シンポジウムの司会者と一般演題の座長には、その領域のエキスパートをお願いした。討論を大いに盛り上がらせてほしかったため、今回の学会から、極めて残念なことに、学会誌の紙面の関係で、一つ一つの討論が掲載されないことになり、司会者及び座長の「まとめの言葉」のみが記録に残ることとなったからである。

このようにして、学会開催の運びとなり、危惧された国鉄のストもなく、幸い晴天にめぐまれ、会員諸君の心からのご協力によって、プログラムにのっとった盛大な学術集会を無事に終えることができたのである。

学術集会と並行して第1日に開催された第3回卒後セミナーは、和田委員長の周到な計画のもとに、食道、肺、心臓疾患の手術適応というテーマで講義が行われ、また救命・救急処置や expert surgeon との「心臓手術のコツ」についての討論が活発に交わされたが、210名の参加者があり、若い人々の勉強の意欲がますます盛んとなって来たのを、この上もなく頼もしく思った。

また、医療器械学会の協力をえて、盛大に催すことができた器械展示も、会員諸君のその方面での新知識をふやすのに役立ったことと思う。

なお、恒例の「夫人の会」を、一日のみの ladies excursion ではあったが、開催し、神戸港の観光、六甲山から丹波路の秋を愛でるドライブ、丹波（立杭）焼の窯元見学、神戸ステーキの夕食会などのプログラムを組んだところ、20人余りのご夫人方が参加され、Trusler ご夫妻も行を共にされ、非常にたのしいツアーであったと伺っている。この ladies program は、わが国の多くの学会の中で、本会のみにも特有の、誇りとすべきものであり、評議員懇親会にご夫人方も同席されるのは、花やかな雰囲気、会員相互の親睦度がたかまり、且つは国際親善にも役立つように思われる。今後もぜひ存続することを念願するものである。

最後に、今回の学会を開催して、私の印象に強く残ったのは、次の二つの点であった。その一つは、研究業績の厳格な審査によって選出された421名の評議員各位が、まさに学会の active member として、司会者、座長あるいは演者の中心となり、学会を引率しておられる真摯な姿に接したこと、もう一つは若い研究者達が、不断熱心に勉強された成果を、堂々と発表され、お互いの中で frank に、open minded で、しかもきびしい態度でもって、討論を交わされた事実である。30年の歴史と伝統を有する本学会の今後の発展と隆盛が、ひしひしと感ぜられ、まことに心強く、うれしく思った次第である。

(写真で、私がかけている gold medallion は、前回特別講演を担当された南カリフォルニア大学の Kay 教授が、今回の学術集会の直前に曲直部前会長に贈られたもので、「日本胸部外科学会々長」という達筆の日本語が刻まれており、歴代の会長は、是非これをつけてほしいとの希望を寄せられた。私が最初に着用する光栄に浴したのである)。

(神戸大学教授)

